



「確かにそれは珍しいですね」

夜も更けた頃、侠客の手配で出された馬車に乗って、春花と白峰と共に帰邸した雪絵。自室にさがり余所行の装いをほどいてもらい、今夜の総会の席の話題を左馬ノ介に話した。

雪絵は初夏からこうして時々、左馬ノ介の眼と配慮の届かない所で、他の武俠などと交流をもつことが増えてきた。それは春花が言うところの“過保護”ではない筈の左馬ノ介としても、義姉への『信頼』の一言ですませられない感情が、まったく湧かないわけでもない状況だった。

刀技の腕が立つとはいえ、やはり人としての未熟さをもった少女が、厳ついスジモノの男衆に囲まれて……それは誰でも心配にはなるでしょう、と左馬ノ介は腹の中で思う。加えて、一家に加わるこれまでがこれまでだっただけに、その気持ちは易々と抑えることも出来ないのだろう。

そんなわけだから、会席を終えて帰ってきた雪絵に、今日の総会の様子はどうだったかのごく自然に着物を畳みながら問いかけた。

けれどそれは、食事が上手に食べられたのか、とか粗相をして他の侠客に馬鹿にされなかったか、果ては性的な言葉や嫌がらせはされなかったかなど、ともすれば総会の内容など切って捨てないばかりの勢いの、雪絵の身の心配ばかりをした問い質しだったようだ。

そんな義弟に対して、少々の気煩わしさを感じたりもしなくもない雪絵だったが、おおむね総会の席のことを素直なモノ言いで伝えた。

それもまた、食事の作法が面倒だったから始まり（続けて『でもまあまあ美味しかったよ』と言うのは言外に左馬ノ介の料理の方が美味い、と言っているのだが、あいにく伝わってはいない）そして組頭達への明らかに好意を持っていない趣旨の雑な感想が述べられる、という話の内容で、中々本題が口にされない。これはそれだけ二人にとっては、まだこうした状況の経験が浅い事も理由かもしれない。

雪絵はそうした報告からそれた体験感想の中に、こうも言う。

第二章 太刀の式

「色々な頭がいるけれど、それに比べて春花さんの頭としての貫禄っていうの？ 静かなのに威厳があって、場に締まりが出るの。本当カッコイイの、春花さんは」

なんであんなに畏れられているんだろう？ という雪絵の疑問に左馬ノ介は簡単に答える。

「なんでも、獅士堂の頭梁にはその名を継ぐにあたって、それ相応の『伝説』があるそうですよ。その為した行いが、頭になったあとにも畏怖を生むんだとか、噂で聞いたことがあります」

「伝説……？」

「それが春花さんの場合は何であるのか、気になるなら俺より本人に訊いてみてはどうです。もしくは白峰さんとか」

うん、と頷き薄着の襦袢姿で足を崩して座る雪絵。自分の部屋では正座もない。

「……でも、ふうん。女侠でもそれだけの畏れや尊敬を集める理由は、やっぱりあるんだね。は一、春花さんはやっぱり凄いな」

そんな義母を大絶賛する雪絵の様子は、頬を紅潮させて口が弧を描いている。

そんな義姉の様子に、左馬ノ介は涼しい態度をとる。

それは彼がこう思うからだ。

例え……否、実際に姉さんが誰かに入れ込む事があっても、それは彼女が形作る関係性の地図の経路にすぎない。そして同時に自分と彼女との繋がる道は確かにあって、自分がそれを強固に踏みしめていることを自分は自覚的だ。そして自分は、例えそれがこの先、姉さんの立場や周囲の状況が変化したとしても、それでも自分と彼女を繋ぐモノはそれほど変わらないだろうと……いや、むしろ俄然 “譲らないだろう”

と当の昔に決意している。

だから今現在、今夜のように物理的な距離を置かされることになっても、雪絵はこうして自分と二人きりで当たり前前に話しをしてくれるから、左馬ノ介は不覚にも安堵する思いがある。その話の内容が、如何に彼女が憧れる人への熱が含まれていても、それはそれだと思える。

第二章 太刀の式

左馬ノ介は年不相応に達観し、春花と『張り合う必要はない』と悟諾しているのだった。

だから今も、雪絵がグダグダとし始めた総会の話から、ようやく出てきた“シマの問題”を聴いて、澄ました顔で意見を述べたのだった。

「『隠しとどめ』は江戸の頃でも、^{おこなって}行って去るような人斬りは稀だったそうですからね。そもそも人を斬るのは、当時は取り締まれていた事でしたから、そこに自分の清廉さを訴える作法はあからさまに極々少数派だったことでしょうから」

「ふうん。昔から珍しい行為を今でもする人が居るのは、この郷らしいってことなのかな」

「刃傷……刀の作法ですからね、そうとも言えます……が」

雪絵との会話をさておいて左馬ノ介は考え込みだした。その様子に怪訝に思い、顔を間近に問う。

「左ノ？」

俯いて顎に手を当てたまま、左馬ノ介は逆に雪絵に訊いてきた。

「姉さん、六月頃から春花さんについて『狩り』に赴いて、どう思いましたか？」

「？ ……どうっていうと？」

「姉さんでも春花さんでも、斬った相手に対してどんな印象を持ちました？
今思うと、その相手をどう思いますか？」

左馬ノ介は先を見ての発言をする、だからこの問いにも何かがあるのだろう、とそう考える雪絵は、彼の問いの意図を考えることはさておいて、素直な感想を口にした。

「弱かった」

ぱつぱつと答える。

その雪絵の言葉に、左馬ノ介はしかし表情を変えない。そして静かに雪絵を見つめる。それは彼女の中での更なる言葉を待っているのだ。

それが分かった訳ではないだろうが、自然に雪絵は言葉を続ける。

「……それに、刀が躰わすモノが……曇っていた、ように感じたよ」

「……………刀が曇っている、ですか」

第二章 太刀の式

自らの出した言葉を重ねられ、雪絵はうん、と頷いて……そして考えた。

「思うんだけどね、弱いっていうのは刀技もだけれど、そりゃ春花さんや私と対等に太刀合える武俠や任俠者の方が珍しいよ。少数派だよ。だけれど、弱いっていうのはきっと、それだけじゃない……」

夜の雪絵の部屋で、灯りが揺れる。陰影をもった義姉の顔を――黒く光彩が映える瞳を左馬ノ介は黙って見ている。

「あの人は刀と共に在るべきの『心』が弱かったんじゃないかと思う。最初は武俠としてまっとうだったかもしれないけど、心が強く在ることをどこかで間違ったから、彼らは追われるような事をしたんじゃないかと思うんだ……」

それで逃げるから狩られる、と雪絵は付け足した。

実際それはほぼ正鵠を射ていると左馬ノ介は思う。獅士堂などから派遣されて行われる『狩り』の対象に限らず、シマの大半の武俠がそう称して、郷に仇なす者や仁義に悖る者、そして堅気を傷つけた者などを追うのは、彼らが俠気にあるまじき『咎』^{とが}を犯したからだ。そしてそれは大概の場合、俠であるうえでの最低限の秩序と倫理に則っていれば犯さずに済む咎である。

「確かに姉さんのいう事はスジです。洋の東西、古今を問わず、社会の中で科を犯す人間というのは、その大体が何かしらの『弱さ』に起因していると師匠も言っていました」

「へえ、それは例えば？」

「怒りや欲望を抑える自制心なんかが、特にそうだと俺も思います」

『自制心』……それは今の話にも適う例えかもしれない、と雪絵は思いながら左馬ノ介に言う。

「左ノのお師匠さんって、西方の方にも関わりを持っているんだっけ」

「そうですね。警務組織に力を持っているとか。あまり詳しい事は言えませんが。……俺が怒られますし」

そういう左馬ノ介の顔はバツが悪そうなので、雪絵はそれ以上追及しないことにして頷く。

「弱さから咎を犯す、と言ってもその弱さは様々でしょうね。先に言いました

第二章 太刀の式

が、弱さという欲望を抑えられないで悪事を働く例が多いですね。次いで感情。相手への怒りや憎悪、嫉妬心、……逆恨みなんかの本質的に行き違いの場合もありますね」

「うん、私が春花さんと狩りに行く際に、白峰さんが目標の事情を聞かせてくれるんだけど。それを思い出しても、感情のもつれから誰かを傷つけたっていうのが多かったな」

「はい、大筋から人が人を傷つける理由は、それほど大差がないのだと思います。それがこの郷でも侠客や武俠が抗争などの内輪以外で、堅気に害を為す、という問題を生み続けている一因なんですよね」

首を傾げて雪絵は考えた。その綺麗な首筋に視線を這わせて、左馬ノ介は彼女の言葉を待つ。

「……人が咎を犯して、自らを間違うのは心の弱さからだという事……なんだよね、左ノが言いたいのは」

「姉さんはそうは思いませんか？」

左馬ノ介の言葉を聞いて、雪絵はしばらく天井を見つめた。そしてそのままどっさりと、畳に身を横たえた。結わえを解いた長い黒髪がぱさりと散った。

「……………」

訝し気に義姉を見遣ると、雪絵は物憂げに身をよじって、顔を刀掛けに向けた。若葉色の柄の刀と、汚れた古い刀。雪絵は言う。

「思うよ。左ノ、私は強く思う。だって、私は私の『心』が弱かったために、死ななくてもいい人をこれまで数多く死なせてきたから」

だから巡って人斬人形は郷に危険視され、春花たちが狩りに出向く事態に至ったのだ。

それが例え、終末は内ゲバの未遂で返り討ちに会い組織が壊滅したにせよ——かの組織と、そこに所属していたかつての雪絵の犯した事は揺るがないし、厳然としたモノだ。

雪絵はかつての己の『弱さ』を痛切に自覚している。

しかし左馬ノ介は、それは『弱さ』というよりも、未熟なだけだったと思っている。だから雪絵を咎める気は毛頭ないので、言った。

第二章 太刀の式

「すみません、姉さん。そんなつもりで話を進めたんじゃないんですが……」

その詫びに、雪絵はまたごろんと身を回して左馬ノ介に向くと、そう？ と口元を歪ませた。

その顔はきつと、今の春花という人物と出逢った後の自分を知っているからこそ出来るモノだろう、と左馬ノ介も軽く笑いで返す。

「さっきから左ノが何を言いたいかって、それも私は少しわかっていたよ」

「そうですか？」

「たぶんだけれどね。左ノは今回の件の下手人の一人、隠しとどめを行った武侠が、果たしてその兇行に及んだのはどういうところだったか、その心は弱かったのかどうかを測れ、と言いたいんじゃないの？」

「う～ん、間違ってはいないですけど、満点とは言えないですね」

「あれ、そう？ じゃあ、なんだっていうのよ？」

腕を束ねて左馬ノ介は部屋の灯りを見る。ゆらゆらと揺れる灯火が瞳に映る。

「……件の真庭念流の遣い手、その武侠は……『心』が定まっていないのだと思います。複数で闇討ちをしながら、一対一での太刀合いの末に自らの心の在り方を示している」

「『心』が定まっていない……か」

左馬ノ介の考えに、雪絵も腕を束ねて思考してみる。

(卑怯な行いをしていながらも、己はそんなモノではない、とその武侠は主張しているのか……)

「じゃあ、彼はまっとうな武侠の精神を持っていながら、何か理由があってそういう不軌を働いているというの？」

「それは今はなんとも言えませんが、もし気になるのなら、今出揃っている情報を元にでも下手人について調べることもしていいんですが……」

「気になりますか？」と左馬ノ介は雪絵の顔を覗きこんだ。それに対して雪絵は、難しい顔をして返す。

「気持ちはある。しかし、答えを知って、それでどうするんのか？ また、どうしろいうのかという気がする。」

「相手の事情を知る事も、太刀合う相手を想うことのウチだって春花さんは言

第二章 太刀の式

っていたよ。でも、結局斬る相手の難しい事情を知って、それでも斬るって...
...なんか、ね.....」

仰向けになる雪絵。次第に吐息がゆっくりと、深くなっていく。やがて瞳を閉じて、そして口を開いた。

「切ない.....っていうのかな.....」

「.....」

義暗姉の想いに、左馬ノ介は肯定も否定もしない。しかし、そっと彼女の意思を訊く。

「それでも、彼を斬りますか？」

左馬ノ介の意図はそこに収斂する。

一室には二人を照らす灯。

二人の耳に届く、秋の虫の音。

一時の静けさに、左馬ノ介は雪絵が返答をせずにこのまま眠ってしまうと、そう思いかけた。

しかし、返ってくる声があった。

「斬るよ.....、私は、誰がどんな事情や想いがあっても、結局は斬る。だって、それが私の求める刀に生きる道だし.....それに春花さんにも求められているし」

「春花さんにですか？」

「うん.....。でも、人に求められているのって、それって自分の心で刀を振るっていないと、そう受け取らないでね。左ノ、私はね.....」

と雪絵は続ける。

「春花さんが私に名をくれて、私を娘として組に引き入れてくれて、とても嬉しかったんだよ。それだけで、自らの刀と左ノ以外に何もなかった私には、存外の幸運だったと思ってる。私は刀で生きる以外にも喜びを与えられた」

「だから春花さんが望んでいることに、姉さんは応えたいということですか？」

顔を巡らせて、部屋の外を向く雪絵。

あの人も今は、会合を終えた後のゆったりとした時間に身を任せているのだろうか、と思う。

「うん、きっとそうなんだと思う。ただ正直、大きなシマを治めるこの組の後

第二章 太刀の式

を継ぐとか、『最強の獅士』の名を継ぐとか、そういうのは興味ないよ。……何か大変そうだしね」

「……………姉さんもそういうことを言うんですね」

口元を片手で覆いながら、左馬ノ介が言うので怪訝な顔をして返す。

「どういう意味よ」

「いえ、人の口元を綻ばせる話になっているなあ、と」

「ますます何よそれ……」

体をよじり、腕をぶうん、と振り回し、猫がじゃれつくように義弟の体を叩く。そんな雪絵に左馬ノ介は歳に見合った顔で笑った。

そして思う。

間違っではない、素直なところだ。しかしそこに一人の『武侠』としての彼女はいるのか？ それとも、それが今の彼女の目指す武侠のカタチなのだろうか——と。

(しかし、それが姉さんにとって刀に生きることを求めることと、衝突していずれかが散じなければいいが……)

3

その夜、黒原は機嫌が悪かった。

そうやってしまうと、それは彼を身近で見る人達にとって、黒原とは常にそういう風を感じられる顔をしているので、これは今現在において黒原が何に対して憤慨甚だしく不機嫌であるのかを詳らかにするべきだろう。

「また今日の総会にも雪の奴を連れて行ったそうじゃないですか。そりゃ何ですか、遠まわしな俺への嫌がらせですか、姐さん？」

「……もう、そんな訳がないでしょう、この子は」

そんな毒づきに嘆息して答えるのは春花だった。

夜分遅くに総会の席から帰邸した、一家の頭である彼女は、帰還して着替えなどの身の回りの事柄を女中と共に済ませると、ひと息つく間もなく広間に坐した。

今回の総会で持ち上がった件に関して、問題への対応を、主要な顔ぶれと話し合うためだ。

第二章 太刀の式

普段は食事や本邸会議に使用される四部屋突き抜けを一間だけ使用して、白峰に加えて青刃の直接の配下である武俠、^{もちくに}持国と、獅士堂抱えの情報屋『^{うんぎょうしゅう} 吽形衆』のまとめ役である^{ありつの}有角を交えての会議の席。

しかし、春花が総会から戻って広間にいるとどこからか聞き付けてきた黒原が、部屋の襖戸を乱暴に開き、ズカズカと足を踏み鳴らして怒鳴り込んできたのだった。

その様子に静かなたたずまいと微笑みで応じる春花。

表情を変えずに腕を組んで黒原を視る白峰と、春花の顔を視て口をつぐむ持国。

春花の雪絵を伴った行動は、この何か月かで確かに増えて来たと言角も知るころだ。

郷の問題を解決に出る小隊の編成、その春花の隊に雪絵を度々加えたりは、まだ黒原も黙っていた。だが、シマの組頭が集う総会の席に、次期四聖と目される自らを差し置いて雪絵が先に列席させられたことが、黒原の自尊心をいたく刺激したようだ。

「俺はもとより、雪のことを認めてすらいないんですよ。忘れた訳じゃないでしょう？ もともとあいつは、あの組織の……」

「黒……ッ」

と、それまで秋の虫の音がか細く聴こえる程に、氣勢を荒く撒き散らす黒原を黙って見ていた白峰が、手の平も出して制するように声を発した。その声の静かで、しかし強い咎めの意に、黒原は歯噛みする。

「それは我ら以外に口外を禁じると言っている筈だ。何より雪絵は組に対してオトシマエを

示したからこそ、この組に迎え入れたのだと忘れるな。あれは昔のことだ」

いいな、と言う白峰に対して、黒原は納得いかなさそうに押し殺した舌打ちをしてみせた。

持国は事情を知らないことではあるが、最古参にして意見役の白峰が『触れるな』と言っている事柄だったので……また有角も空気を重んじて……彼らは黙っていた。

第二章 太刀の式

「.....けど、新参者が大層可愛がられているのは確かでしょう。腕が立つのは分かるが、それでいきなり次の頭梁だ、なんてよ。俺だけじゃなく納得できない者は大勢いますよ」

「黒、自分が納得いかない事をあげつらうのに、賛同者を並べて数に頼るな」

「そんなこたア、わかってますよ。でも実際そうでしょうが」

実際、その通りなのだ。

突然、春花姐さんが連れて来て、組の中でも浮いている性格の幼い少女。素性が謎であり奇異であり、人の目を引く割に愛想もなく、そのうえ刀技の腕はすこぶる冴えて男を寄せ付けない。そこが可愛げがない。

そんな印象を持つ者であり、しかも幾分も歳もいかない身でありながら、現頭梁から次の頭として期待されている雪絵。それに対して組の若い衆を中心とした者達が、まったく反感を抱かない方がおかしいというモノだろう。むしろ、これに端を発して組内部で、そうした層によって雪絵への圧力や嫌がらせ、果ては暴力暴行といった事件が起こっていないのは僥倖だ。

もっとも、それは頭である春花が雪絵を可愛がっていることが大きく関係しているし、次いでこの組での存在感も大きい重鎮であり四聖である白峰が、春花の意向を推して動いていることもあるからだ。そこには現在、半年以上に及ぶ雪絵との交流を経て、白峰も彼女に親しみを持っていて認めているという事情もある。

それに雪絵も漫然とこの秋までを過ごしてきたわけでもない。彼女は獅土堂の組に来てからというもの、飽きる事もなく道場稽古に精を出してきていた。組の侠達と繰り返し共にしたその時間が、彼らにも雪絵を組の一員として認めさせていた。

それに西のシマには女性を尊重する精神的姿勢が、割と普通に根付いている。

そんな中で、雪絵に対して否定的な言動をとっている侠達というのは、組の中でも実力がある向きの者達が多い。黒原はそうした層でも顕著な顔といえた。

自らの立場を省みずに、今のように頭である姐さんに直接モノ申しをしてくる黒原を、春花は『若さね.....』と微笑んで返すのだが、それで黒原の内々のわだかまりは何も解消されはしないのだろう。こうした遣り取りは何度も起こっている。

第二章 太刀の式

春花が毅然と、確固と、雪絵への期待と望みを強く主張しないことも、それを助長している。

それは出来ないのではなく、しないだけだと、黒原は気付いていないのだろうが。

それもまた実際。

「姐さんがあいつに肩入れするのは、前立ってあいつのことが何か視えていたかららしいですが、それは姐さんの事情でしょう」

「あら、随分ね。頭梁である私の事情を掬してくれないの？ 黒原は。哀しいわね」

本来なら頭としての立場で威圧し、圧迫することは容易い。しかし、そういう態度で組の者達と春花は接しない。

黒原もそうした春花姐さんの大らかさを存外悪くとっていないので、怒気を全力でぶつけ辛い。

「.....チッ。だったとしても、姐さんの一存だけで頭.....この獅士堂の頭梁に祭りあげるのはどうだって話ですよ。あれがそんな器だっていうんですか」

座っている春花に対して、いつまでも仁王立ちでいるのも失礼か、と思うくらいには春花の穏やかな対応に冷静になる黒原だったのか、ゆるゆると膝を曲げ、一同の輪に加わるように腰をおろした。

「器かどうか、か.....。それは儂も何とも言えんと思うが、一度聞かせてくれ春花。それでこいつも、少しは何かの足しになるかもしれないだろう」

横から白峰が和を取り持つように言ってくる。

それに対して春花は頬に手を当てて、涙袋のある瞳を細める。それは問われた答えを考えているようにも見えるし、それとも自分の考えを言うこと自体を思案しているかにも見える。とまどいを隠すような仕草だったかもしれない。

「ううん.....じゃあ、ここにいる者にだけ、ちょっと話してみることにしますね。というか、私も難しい話なのよ」

黒原と白峰、そして持国と有角の二人の俠達も、春花の方を見遣りその言葉を待つ。

「.....最初にわかって欲しいのだけれど、というか殊更言わなくても分かって

第二章 太刀の式

くれると嬉しいのだけれど、私はこの組の皆を家族だと思っているわ。白峰さんは兄貴分だし、黒原は手のかかる弟たちの一人ね」

口許を緩やかにして、春花は言う。

「そしてあの子は……雪絵は私にできた娘なのよね。私は我が子としてあの子を組に迎えたのは、最初に面通しで言ったわよね」

それでね、と春花は皆に向けて続ける。

「私は家族である者達に、皆想いを傾けているつもりよ。そこに大小の差があるのは許して欲しいところだけれど、でも私は常に思っているのは、親が家族にしてやれる事をね」

「親が子にしてやれる事で、価値ある事は何か……か？」

「私達が斬った張ったの武侠という生業をしていて、いつ果てるとも知れない身なら、尚更にね。気を巡らせて考えてしまうわ」

そんな事を言う春花に、有角が年甲斐もなく情けない顔をして、「そんな事を言わないでくださいませ、大姐さん」と言った。黒原は黙って春花を視ている。

「そこに偏りが出てしまうことで、黒原に嫌な思いをさせているのはわかるわ。でも、それぞれにはそれぞれに必要な事があるものよね」

「……………そうだな」 白峰が肯く。

「そしてあの子が頭たる器かどうか、だったわね」

「……………はい」

黒原の声にはまだ不機嫌さが表れている。納得の出来ない事を、納得できるかどうかはともかくとして、この組で武侠としてやっていくうえでこの問題は、自分にとって避けては通れない問題であると彼は諒解している。だから柄にもなく氣勢荒く、熱情を帯びて雪絵に対して批判的なのだ。だから黒原には、これから先、雪絵が獅士堂の頭梁になるにしても、それを認められるかどうか、彼女を頭に推すに足るだけのモノを自分が持ち抱けるか、それは大きな問題なのだ。

そこに雪絵の器量を提示するのは間違っていない。

それに対して春花は、

「……けれど正直、頭になる器だとは、今現在は言い切れないと思うわ」

その言葉に持国と有角の二人が背筋を伸ばして黒原を視た。白峰はゆっくり

第二章 太刀の式

と春花と黒原を交互に見遣る。

「なんですか.....それ」

伏せた顔から、そして全身から黒い感情が噴き出しているかのような黒原。

「あまり深くは考えないで。ただ、どんな武俠にもいえることよ。始めは海のモノとも山のモノとも知れない。あの子は今は、未全で未然。そう言いたいのだろ

それは自分もそうであったし、黒原もそうである、と春花は言いたいのだろう。そう思いながらも、白峰は隠すことをせずに、春花の心中を読み言う。

「期待しておるのだな」

後に続いた白峰の言葉に、黒原は思わず彼を睨み付ける。

その雪絵を擁護するあなたも、直弟子の自分よりも雪絵という幼い武俠に期待しているのか、と言わんばかりに。

しかし、春花はそんな黒原の黒い感情を見透かしたように、柔らかな声で言う。

「けれどそれは黒原、あなたも同じこと。あなただってまだそうして人にわだかまり、心を曇らせた自らを変える途上の、未熟な子。でも肝心なことは、今の弱さではないわ。あなたたちは共にこれから変わっていける。私はその未来を視て、期待しているのよ」

「.....ぐっ」

拳を握り締めうつむく黒原だったが、即座にその固く握った拳で畳を殴りつけて立ち上がった。

「納得できるか！ あいつに何があるってんだ！ ちょっと腕が立つだけで、この郷を治める武俠の頭が務まるなんて、ふざけるなッ！」

ごねている自分を黒原も分かっている。しかし、このところの腹に溜まっていたモノが、吐き出す先を求めていたのも確かなのだ。その矛先が、立場も年齢も上の春花に向いたことは、未熟さでしかないことも理解しながら、それでも納まらず想いをぶつけた。

「そんなんでほだされて、あいつは報われねえんだッ 俺は雪を認めない！」

勢いで吐き出した言葉に、春花は僅かに瞳を伏せて、しかし黒原をしっかりと見返した。

第二章 太刀の式

青刃つながりの武俠、持国が「言い過ぎじゃあないかい」と誰にともなく小さくつぶやいた。

重く沈み込む場の空気の中で、秋の虫の泣き声だけが耳に入る一時がながれる。

「……ならばお前の眼で何が視えるか、試してみてもうだ、黒原」

と沈黙を破り、息を荒げる黒原に向けて言ったのは低い声の白峰だ。

「まず『何があるか』。雪絵の器量を自らの眼と心で見定めてみてはどうだ。お前はこの夏から雪絵との試合をしなくなった。なればお前の知らぬところで、あいつは何かを得ていつているぞ。そこにはお前が知らぬ春花が心を傾ける何かがあるのかもしれない」

「俺にあいつとどうしてろってんですか、師匠オ……」

三白眼が責めるような弟子を視て、ふむ、と白峰は顎に手をあてて、そして間を置かずに答えた。

「お前、今回の件の『狩り』の隊に、雪絵と共に春花についていけ。そこで、武俠としてのあいつというモノを、少し見てみろ」

「……………アア!!」

「まあ、それだけで何か簡単に変わるとは言わん。しかし、お前の何かの足しにはなるだろう。……どうだ、春花」

その提案に、春花は緋色の瞳の彩を煌めかせて口許をほころばせた。鷹揚に頷いてみせる。

「そうしなさい、黒原。力を貸してね」

毒づいた自分に対して、何も変わらない朗らかさをみせる春花に、黒原は目を合わせる事が出来ない。しかし、憮然とした顔で腰を下ろすと、シニカルな笑みを浮かべて言った。

「姐さんの隊での狩りだ、こりゃ退屈はしなさそうですねえ」

それでどうにか場の空気が今の席の本来の目的——真庭念流を含む下手人の搜索に関しての話し合い——に向けて動き出した。

春花と白峰、そして後からやってきた黒原の三人と同席した二人は、それで大きく胸をなでおろしたのだった。

.....続く。